The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	絵本が描く現代スウェーデンの「こども」 : ピヤ・リンデンバウム作品を例に
Author(s)	上倉, あゆ子
Citation	IDUN ー北欧研究ー. 2019, 23, p. 185-194
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71781
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

絵本が描く現代スウェーデンの「こども」

ピヤ・リンデンバウム作品を例に[1]

上倉 あゆ子

1. はじめに

19 世紀末から 20 世紀初頭にかけてエルサ・ベスコフ（Elsa Beskow, 1874-1953）をはじめとする多くの人気絵本作家が登場したスウェーデンでは，現在に至るまで豊かな絵本文化が育まれている．絵本が描くこどもの姿は当初非常に模範的なものであり，道徳や教訓を読み手であるこどもに示す内容が中心であった．その後，アストリッド・リンドグレーン（Astrid Lindgren, 1907-2002）による「ピッピ」の登場以降，児童文学が描くこどもの姿は徐々に変化していき，こどもにとって手本となるようなものから，より身近なものになり，取り上げられる話題も日常生活に密着したものが多くなっていく[2]．

本稿では，今日のスウェーデンにおいて代表的な絵本作家の一人であるピヤ・リンデンバウム（Pija Lindenbaum, 1955-）の作品を中心に取り上げ，そこで描かれるこどもの日常生活を検証し，絵本が非常に今日的な情景を描いていることを確認したい．主として就学前の幼児を主人公とするリンデンバウム作品においては，多様な家庭環境や，就学前学校での日常など，現代のスウェーデンに暮らすこどもたちにとって非常に身近な情景が描かれることが多い．絵本の主人公が暮らす環境からは，それがスウェーデン社会の「今」を如実に反映したものであることが見えてくる．

絵本の舞台が非常に「スウェーデン的」であるということは，読者をスウェーデン国内に居住するこども（とその周囲の大人）に限定する要素になりうるとも考えられるが，リンデンバウム作品は複数言語に翻訳され，国外でも一定の評価と人気を得ている．リンデンバウムが描くこどもたちは，日常生活の中で誰もが体験しうる不安，不満，困惑と向き合うことが多い．大人から見れば些細なことであったとしても，幼児にとっては重大となりうるできごとや気持ちの動きをす

---

[1] 本稿は，口頭発表「絵本が描く危機を乗り越える子供たち―ピヤ・リンデンバウム作品に見る子供観―」（日本比較文学会東京支部例会，2017 年 3 月 18 日）および「絵本が描く現代スウェーデンの「こども」とその日常」（北ヨーロッパ学会 2018 年度研究大会，2018 年 11 月 10 日）に基づいている．

[2] スウェーデンにおける絵本を含む児童文学の流れ，および，絵本におけるこども像の変遷については，上倉（2017）および Olsson, Bernt, Algulin, Ingemar, m. fl. (red.). (2009)等を参照されたい．

くい上げていく．そして，クローズアップされるのは，日常の中で抱えた負の感情と自ら向き合うこどもの姿である．本稿では，普遍的要素を持ちながら，やはり非常に北欧的であるともいえる絵本の中のこどもたちを取り上げ，スウェーデンにおける人気絵本に見られる「こども」の姿を検証したい．

2. 絵本作家ピヤ・リンデンバウムとその作品

2.1. 作家略歴[3]

ピヤ・リンデンバウムは，1990 年に絵本『エルス＝マリーと小さなパパたち』（*Else-Marie och småpapporna*）でデビューした．7 人の小人のように小さな父親と 1 人の普通サイズの母親を持つ女の子を描いたこの作品は，国内外で話題となった．その後，挿絵画家・絵本画家として国内外でその実力を認められていき，2000 年には『ギッタンと灰色オオカミ』（*Gittan och gråvargarna*）でアウグスト賞を受賞する．この作品から始まる「ギッタン」シリーズにより，絵本作家としての人気を不動のものとする．これまで 4 作が刊行されている「ギッタン」シリーズでは，就学前学校に通う女の子ギッタンを主人公に，こどもの日常生活の中に存在する恐れや願望を描いている．2008 年にアストリッド・リンドグレーン賞，2012 年にドイツ児童文学賞を受賞するなど，リンデンバウムは常に高い評価を得てきており，現在のスウェーデンを代表する絵本作家の一人とみなされている．

2.2. 作品の特徴

リンデンバウムの作品は，3〜6 歳を対象とした物語絵本が中心である．作品の舞台や設定に見られる特徴としてまず挙げられるのは，主たる読者であるスウェーデンのこどもたちにとって身近な情景である．多くの場合，舞台は家庭もしくは就学前学校であり，ごく普通の日常生活が描かれる．主人公が通う就学前学校のこどもたちの姿からは，スウェーデン社会が多文化化していることが見てとれる．また，シングルマザー，ステップファミリー，同性同士のカップルなどが描かれるという点でも，家族形態が多様化した今日のスウェーデンの状況が反映されていると言える．長期休暇を南のリゾート地で過ごすといったスウェーデン人にはなじみのある余暇の過ごし方も登場するなど，現在のスウェーデンに暮らすこどもたちにとっては共感を覚えやすいと考えられる設定であることがほとんどである．

その一方で，作品の題材となるのは，対象を「スウェーデンのこども」には限らない普遍的な事柄であることが多い．高い所に登ることへの恐怖，友人宅への

---

[3] Petersson & Schönström (red.) （2017:501-502），von Baumgarten-Lindberg（2011）および http://www.rabensjogren.se/forfattare/115949-pija-lindenbaum 参照

初めてのお泊まりで感じる違和感,「きょうだいが欲しい」という願望，大人たちが自分の話をきちんと聞いてくれないことへの不満など，時代や国を問わず，こどもたちが日常生活の中で直面するであろう問題が取り上げられる．作品の中心となるのは，そういった状況において，こどもたちが自分の気持ちと向き合う過程である．表１は，リンデンバウムの主要な作品に見られる，こどもたちの様々な「危機」とその「問題解決の過程」について整理したものである．

表１．リンデンバウム作品に描かれる危機と問題解決の過程

作品	描かれる危機と問題解決の過程
『エルス＝マリーと小さなパパたち』 *Else-Marie och småpapporna*（1990）	いつもはママが来る学童保育へのお迎えに，その日は 7 人の小さなパパたちが来ると知らされる ⇒あれこれ心配し，具合が悪いと言って職員の部屋で横にならせてもらうが，実際には心配したようなことは何も起こらず穏やかに一日を終える
『ギッタンと灰色オオカミ』 *Gittan och gråvargarna*（2000）	怖がりで，就学前学校の庭にある小屋の屋根に登ることができない ⇒森の中でオオカミたちと出会い，一緒に遊ぶ．木の上に登ったものの下りられなくなったオオカミを助けに行く
『ギッタンとまぬけなヒツジ』 *Gittan och fårskallarna*（2002）	休暇中の両親と共にリゾート地のホテルに滞在しているが，プールではなく砂場で遊びたい ⇒プールサイドから抜け出すと，困っているヒツジたちに出会う．ヒツジたちに泳ぎ方を教えたり，毛を刈ったりして助けてあげる
『ギッタンとヘラジカのきょうだい』 *Gittan och älgbrorsorna*（2003）	一人っ子のギッタンは 3 頭のヘラジカに兄弟になってもらおうとする ⇒ヘラジカたちときょうだいになって遊んでみるが，思っていたようにはならず，きょうだいはいなくてもよいと考える
『オーケのママが全部忘れちゃったとき』 *När Åkes mamma glömde bort*（2005）	ある朝オーケが起きると，ママがドラゴンになり家事も仕事もできなくなっている ⇒ママと一緒に出かけて一日世話をする．最後におばあちゃんに「少し休めばよくなる」と言われ，翌朝になるとママは元通りになっている
『リトル・ズラタンと大好きなおじさん』 *Lill-Zlatan och morbror raring*（2006）	エラ（＝リトル・ズラタン）と仲良しのトミーおじさんの家にステーヴェという男の人が現れ，エラとトミーおじさんとの関係は変わってしまう ⇒エラはステーヴェのことを無視し続けるが，一緒にサッカーをすることで打ち解けていく

『ケンタとバービー人形』 *Kenta och barbisarna*（2007）	サッカーが得意なケンタはバービー人形でも遊びたいが，人形遊びをする女の子たちの輪の中になかなか入れてもらえない ⇒近くでじっと待っているうちに女の子たちに仲間に入れてもらえる．最後には男の子と女の子が一緒になってスカートを履いてサッカーをする
『シーヴは眠りながら迷子になる』 *Siv sover vilse*（2009）	シーヴは仲良しになったセリシアの家で初めてお泊まりをするが，自分の家とは勝手が違うことに戸惑う ⇒夜中にセリシアのことを探しに行くと，不思議な人たちや動物に出会う．セリシアが見つかり，一緒に流しの下の戸棚の中で眠って朝を迎える
『ギッタンかくれる』 *Gittan gömmer bort sej*（2011）	ギッタンは友達の家で抱っこした赤ちゃんを落としてしまい，ベビーシッターに頭ごなしに怒鳴られる ⇒自宅のクローゼットに隠れ，現れた動物たちと関わるうちに，ベビーシッターが仲直りしにやってくる
『ドリスいなくなる』*Doris drar*（2015）	自分のことを正当に扱ってくれない家族に腹を立てたドリスは家からいなくなる ⇒怒りと共に長く伸びた髪に守られながら旅をする．帰宅してみると家族が自分の不在にすら気付いていなかったことを知り，怒りを爆発させる．家族はドリスに謝り，一緒に遊ぶ

問題解決の過程において，大人の関与は極めて希薄である．こどもは自分の世界を持っており，幼くても自分で考えている，ということが作品の中心であり，周囲の大人や友人に助けられるのではなく，自分で考えて自分で納得することに重きが置かれている．リンデンバウム作品のそういった場面では，しばしば何らかの動物が登場し，主人公は動物たちと関わり合いながら自分の気持ちと向き合っていく．『ギッタンかくれる』という作品では，決して故意ではない失敗に対していきなり大声で怒鳴りつけられた主人公がクローゼットに隠れる．すると，周囲にカワウソのような姿の動物たちが現れる．動物たちと主人公ギッタンとは，まず次のようなやりとりをする．

- Vi kan tycka synd om dej om du vill, säjer dom.
Du kan få vara i vår famn.
Fast det vill inte Gittan.
Hon vill bara vara själv.

「もしそうしてほしかったら，君のことをかわいそうだと思ってあげるよ」
動物たちは言った.
「抱きしめてあげてもいいよ」
でもギッタンはそうしてもらいたくはなかった.
ただ一人になりたいだけ.

動物たちは何とかしてギッタンに元気を取り戻させようと，その後も様々な提案を繰り返していき，最終的にはギッタンが動物たちを放り投げて互いに楽しむことになる．しかし，傷ついたこどもが同情よりもまずは一人になることを求めているという点は，リンデンバウム作品全体に通底する自立したこどもの姿であると言える.

『ドリスいなくなる』においては，母と娘ドリス，父と息子エーゴンからなるステップファミリーの中で，幼い女の子ドリスが不満を溜めて家出をする．ドリスはまだ字を綴ることもできないことが作品終盤で読み取ることができるが，そのように幼いドリスを家出の最中に守り助けてくれるものは，怒りと共に長く伸びた彼女自身の髪の毛である．家を出てすぐに，顔なじみの大人に少しだけ話を聞いてもらう場面があるものの，誰かに諭される，もしくは助けられるということはない．ドリスは，冒険をしながら先に進んでいくが，自分が死んでしまって自転車をエーゴンに取られてしまってはたいへんだと考え，家に戻ることにする．しかし，自分の不在をさぞや心配していることだろうと思っていた家族は実際には何事もなかったようにしていたため，ドリスは怒りを爆発させる．ドリスの話を聞いた大人たちは，これまでのことを謝罪し，ドリスが中断させられていた砂場遊びの続きを家族揃って完成させることにする.

ドリスの家出は，当人にとっては遠い異国に向かう長く危険なものとして語られているが，読者にはそれが実際は家の周辺のごく狭い範囲で起こっているということが理解できるようになっている．物語の舞台はあくまでもこどもの日常の生活空間であり，日々の暮らしの中でこどもが体験する「見てもらえない」「聞いてもらえない」という不満が取り上げられている．ドリスの心の声を聞くことが，作品の中心になっていると言えるだろう.

3. 有能にならざるをえないこどもたち

2章で見てきたようにリンデンバウム作品では普通のこどもが日常生活の中で直面する様々な問題が取り上げられているが，多くの場合，それはこどもの意思を尊重しない大人の姿を映し出すことになっている．こどもは誰でも水遊びが好きだと決めつけているギッタンの両親（『ギッタンとまぬけなヒツジ』），パートナーに合

わせようとしてエラとの決まり事を無視してしまうおじさん（『リトル・ズラタンと大好きなおじさん』），男の子はサッカーをするものだと思っているケンタの父親（『ケンタとバービー人形』）など，悪気はなくとも，こどもの声を聴くことができていない大人たちが多く登場する．そして，砂場遊びを中断させられたり，好きではない服に着替えさせられたりするドリス（『ドリスいなくなる』）をはじめ，声を聴いてもらうことのできないこどもたちは，決定権のない弱い立場に置かれている．リンデンバウムの絵本では，こどもの大きさに対して大人が極端に大きく描かれていることが多く，その対比からこどもの立場の弱さが視覚的にも印象づけられる．また，『リトル・ズラタンと大好きなおじさん』では，大人とこどもの目線の高さが異なることを強調した構図が特徴的であり，『シーヴは眠りながら迷子になる』では，初めて訪問した友人宅の玄関ホールが，広く，歪んだ空間として描かれている．主人公の不安や不満を表す，こどもの視点からの大胆な構図が見られることも，リンデンバウム作品が持つ特徴の一つである．

そうした一方で，『オーケのママが全部忘れちゃったとき』のように，大人もまた弱い存在であることが描かれる場合もある．この作品では，ドラゴンになってしまい何も分からなくなってしまった母親を，幼いオーケがまる一日しっかりとお世話しようとする．公園に連れ出したり，医者に診てもらったりしても母親はよくならないが，一晩ゆっくり休ませてみると元通りの陽気な母親に戻ることができる．大人の読者には，おそらくはシングルマザーであると思われる母親が仕事と家事育児に追われる日々に疲弊してしまった状況であることが読み取れる内容となっている．

このように，大人たちが不完全であったり，弱い者であったりする中で，こどもたちは問題解決のためには自ら行動を起こさざるをえない．今日においては，「子供もまた多くの選択をしなければならず，状況を理解できなくてはならず，社会的状況を読み解き，自分で決断を下さなければならない」[4]のである．そのような状況の中，リンデンバウムの作品の主人公たちは，必然的に「大人社会に支配されるだけではない，自身が社会的アクターである」「有能なこども（det kompetenta barnet）」[5]になっていると言えるだろう．このような，自立して自分で考えるこどもの描写は，これまで拙稿でも指摘してきたように，今日のスウェーデン児童文学・児童文化において広く見られる傾向である[6]．

---

[4] Fransson (2010: 15)
[5] Kåreland (2009: 25)
[6] 上倉（2015）および上倉（2017）

4. おわりに

ここまで見てきたように，ピヤ・リンデンバウムの絵本においては，環境設定は今日のスウェーデン社会がそのまま反映されたものとなっており，現地に暮らすこどもの多くが身近なものとして捉えやすいものとなっている．それに加えて，スウェーデンのみならず，こどもであれば誰もが経験をする可能性のある，日常の中の問題を取り上げることで，国を問わず読者が共感を覚えることのできる作品群となっている．この，非常にスウェーデン的でありながら同時に普遍性を持つということが，リンデンバウムを国内外で人気作家としている理由ではないだろうか．そして，リンデンバウム作品の中では，大人の介在しない環境で自分の内面と向き合うこどもたちが多く描かれている．このことは，「有能なこども」という概念で示されるような，今日の北欧におけるこども観と合致していると言える．

スウェーデン児童書研究所（Svenska barnboksinstitutet，略称 Sbi）による「児童書出版に関する年次報告 2015 年版」（*Bokprovning på Svenska barnboksinstitutet: En dokumentation Årgång 2015*）には，児童文学における親の不在に関する次のような指摘も見られる．

> Sbi har i Bokprovningen i många år tittat på hur föräldrar porträtteras. När det gäller barns och ungas relationer till föräldrar är det mesta sig likt och liksom många tidigare år är föräldrarnas kanske mest centrala roll i barn- och ungdomslitteraturen 2015 att vara frånvarande.
>
> Den frånvarande föräldern är ett tema som är berättartekniskt viktigt. Författarna behöver ofta få bort föräldrarna för att barnen och ungdomarna ska kunna få en större frihet att agera, utvecklas och lösa problem och mysterier på egen hand.

> Sbi は児童書出版に関する年次報告において，親がどのように描かれているかを長年にわたり見てきている．こども・若者と親との関係にはほとんど変化がなく，これまでの多くの年と同様，2015 年の児童・青少年文学において親が果たしたおそらく最も中心的な役割は，不在であることであった．
>
> 不在にしている親というのは，語りの技法的に重要なテーマである．こどもや若者をより自由に反応させ，成長させ，問題や謎を自分で解決させるために，作家はしばしば親を取り除く必要がある．

リンデンバウムの作品においても，就学前の幼いこどもを主人公としてその日常生活を描いていながらも，親は登場しない，もしくは非常に限定的な役割しか

果たしていないということがほとんどである．リンデンバウムは，徹底して「こども」の視点から世界を捉えて描き，幼児であっても皆自分の意見や考えを持つ「個人」であることを示している．このように，こどもを個人として尊重し，その声を聴こうとする姿勢は，北欧の児童文化において広く見られる傾向であると考えられる．その一方で，どこまでの自立をこどもに求めているのか，自立したこどもの描写は理想像の提示にもなっていないか，といった疑問も浮かんでくる．スウェーデンをはじめとする北欧諸国における，「こども」というものの捉え方について，今後も更に検証を重ねていきたい．

Skildring av barn i nutida svenska bilderböcker

Pija Lindenbaums böcker som exempel

Ayuko Agekura

Sammanfattning

Pija Lindenbaum är en av de mest kända och populära bilderboksförfattarna i Sverige. Miljöerna i hennes böcker är mycket ”svenska” och läsare i Sverige kan lätt känna igen sig dem. Huvudpersonerna i berättelserna är barn i förskolåldern och det är deras vardag som skildras. Barnen som skildras i böckerna möter olika svåra situationer och problem som för vuxna är små saker men för barnen själva är av mycket stor betydelse eller skrämmande. Detta gör Lindenbaums böcker allmänmänskliga också.

Det kan vara en flickca som inte vågar klättra på taket på koja, en pojke som vill leka med flickor som har dockor, eller ett barn som inte får göra färdigt vägen som det bygger i sandlådan. Det är typiskt hos Lindenbaum att barnen försöker lösa sådana små (och stora) problem själva och försöker förstå och bearbeta sina känslor i miljön där vuxna inte är synliga. Liksom i många andra barnböcker i Sverige har vuxna ingen framträdande roll och barnen tänker själva och löser problem på egen hand. Detta stämmer med begreppet ”det kompetenta barnet” som ofta tas upp i diskussioner kring barnkultur i Norden.

Att bemöta ett barn som en individ med egna tankar och eget liv är inget nytt i svenska barnböcker. Det väcker dock också frågor om hur pass självständiga barn ska vara, om det inte är de vuxnas idealbild av barn som skildras i dagens nordiska barnböcker och så vidare.

作品

Lindenbaum, Pija. *Else-Marie och småpapporna*. 1990. Bonnier Carlsen.
————. *Gittan och gråvargarna*. 2000. Rabén & Sjögren.
————. *Gittan och fårskallarna*. 2002. Rabén & Sjögren.
————. *Gittan och älgbrorsorna*. 2003. Rabén & Sjögren.
————. *När Åkes mamma glömde bort*. 2005. Rabén & Sjögren.
————. *Lill-Zlatan och morbror raring*. 2006. Rabén & Sjögren.
————. *Kenta och barbisarna*. 2007. Rabén & Sjögren.
————. *Siv sover vilse*. 2009. Rabén & Sjögren.
————. *Gittan gömmer bort sej*. 2011. Rabén & Sjögren.
————. *Doris drar*. 2015. Lilla Piratförlaget.

参考文献

上倉あゆ子「スウェーデンにおける「子どもへの死の語り」―絵本が描く「死の受容」」東海大学文学部編『東海大学文学部紀要　文学部 103』（2015）pp.1-14.
上倉あゆ子「スウェーデンの絵本に見られる子供像の変遷」東海大学文学部編『東海大学文学部紀要　文学部 106』（2017）pp.69-80.
Fransson, Birgitta. ”Barn och vuxna i skilda världar”. *Opsis Barnkultur*. 2010:4. pp.13-15.
Kåreland, Lena. *Barnboken i samhället*. 2009. Studentlitteratur.
Olsson, Bernt, Algulin, Ingemar, m. fl. (red.). *Litteraturens historia i Sverige*. 2009. Norstedts.
Petersson, Margareta & Schönström, Rikard (red.). *Nordens litteratur*. 2017. Studentlitteratur.
Svenska barnboksinstitutet. *Bokprovning på Svenska barnboksinstitutet: En dokumentation Årgång 2015: 15 mars–21 april 2016*. 2016.
von Baumgarten-Lindberg, Marianne. ”På Spaning efter barn i vår tid”. *Opsis Barnkultur*. 2011:1. pp.58-65.

インターネット上の資料

Rabén & Sjögren 社 ”Pija Lindenbaum”（最終閲覧日：2019 年 1 月 25 日）
http://www.rabensjogren.se/forfattare/115949-pija-lindenbaum